

## 特集 2

# 市民・患者に向けたヘルスライティング Health writing for public and patients

奥原剛<sup>1)</sup>、高山智子<sup>2)</sup>  
Tsuyoshi Okuhara<sup>1)</sup>, Tomoko Takayama<sup>2)</sup>

1) 東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野

2) 国立研究開発法人国立がん研究センター がん対策研究所 がん情報提供部

2) 東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻 がんコミュニケーション学分野

1) Department of Health Communication, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

2) Cancer Information Service Division, Institute of Cancer Control, National Cancer Center

2) Department of Cancer Communication, School of Public Health, University of Tokyo

本特集では、第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会のシンポジウム「市民・患者に向けたヘルスライティングのアートと科学」での 3 つの講演内容をもとに、各講演の演者による総説を掲載します。ウェブサイトやソーシャルメディア、説明文書等の文字媒体を通じて行われる公衆衛生情報は、市民・患者にとって理解しやすく、市民・患者の知識や力となり、適切な行動につなげる効果が期待されます。本特集では、そのような公衆衛生情報の作成を「ヘルスライティング」と呼びます。本特集では、ヘルスライティングの実践及び教育経験を有する 3 名の執筆者が、それぞれの異なる立場・視点から、ヘルスライティングに求められる知識・スキル・価値観を考察します。

1 つめの総説では、奥原が、ヘルスライティングの定義、国外及び国内の動向をご紹介し、公衆衛生の専門家から市民に向けたヘルスライティングに焦点を当てました。2 つめの総説では、国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部の高山が、同センターのウェブサイト「がん情報サービス」を題材に、保健医療の専門家から患者に向けたヘルスライティングについて執筆しました。3 つめの総説では、帝京大学大学院公衆衛生学研究科研究員の小川留奈先生が、メディアから市民・患者に向けたヘルスライティングにフォーカスし、非医療者と医療者それぞれのライティングにおける強みと弱み等を考察していただきました。

ヘルスライティングが包摂する対象は広く、書き手、媒体、読み手によって、ヘルスライティングに求められるスキルは異なると考えられます。シンポジウムにおける小川先生のご講演の最後に、小川先生より次のような問いかけがなされました。「書き手個人のセンスや努力のみに頼ることなく、媒体や読み手に応じて柔軟に書き分けられるヘルスライターを増やしていくには、これからどのような取り組みが必要だろうか？」本特集が、今後のヘルスライティングの改善に向けた人材育成等の議論のきっかけとなれば幸いです。